方言教材作成に際しての諸問題

島本　智美

【本書の記号・用語について】

熊本方言でも、友達同士のカジュアルな会話で使われる表現と上司など目上や年長の人と話すフォーマルな表現がある。本教材ではどちらかに限定せず、どちらのパターンも紹介するという編集方針となったため、一目でわかる▲や▶を使った記号を採用した。▲が付されている表現は相手に敬意を表すフォーマルな表現となり、▶は対等な立場で親しみを持ったカジュアルな表現を表している。

一方、熊本方言にも共通語のように男女差があり、その差はかなり大きい。男女どちらかしか使わないという表現（例えば、男性しか使わない「お前」を意味する「ぬしゃ」など）も多くあり、男女別の記号を付すことも検討されたが、煩雑さを避けるため、本教材では男女どちらが使用しても違和感のないニュートラルな表現での統一を目指した。

用語については、日本語教育に携わったことのない人が教える立場になって本教材を使用することを想定して、『聞いておぼえる関西(大阪)弁入門』(ひつじ書房）や『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク）の各国語版に掲載されている用語解説を参考とし、本教材で扱っている用語に限定して掲載した。

【1課　質問する】

「質問する」場面は多岐にわたるが、本教材では使用対象となる留学生が遭遇することが予想される「わからないことば」「漢字の読み方」「やり方」をそれぞれ尋ねる３つの場面を取り上げることにした。できるだけシンプルにという編集方針に沿って、わからない言葉を聞く場合は、「〇〇ってなに？」の「って」が促音が落ちて「て」、「なに」が「なん」となれば、熊本方言らしくなるという程度にとどめた。また、各セクションの「練習しよう」では、それぞれの答えは載せず、近くにいる熊本方言話者に実際に質問してもらうことを意図している。

「やり方をたずねる」場面では、「どうやって」を「どぎゃんして」としている。地域によっては「どがん」となる地域もあるが、「どぎゃん」と「どがん」がそれぞれどの地域で主に使われているのか、どちらが優勢なのかについて、現段階では正確なデータは得られていない。煩雑さを避けるため、本教材では「どぎゃん」のみを使用しているが、本教材の使用者が住んでいる地域によっては「どがん」の方が自然な場合も考えられるため､教える側の熊本方言話者が適宜より自然な方を提示してほしい。

【2課　誘う・断る】

「今飲み会してるから、来ない？」という誘いのパターンは熊本方言では「今飲み会しよるけん、来ん？」となる。この一文に「している」というアスペクト形式、接続詞「ケン」、動詞の活用形といった要素が含まれている。熊本方言では「シテイル」は「～ショル」「～シトル」に分化する。動詞の活用形も共通語とは異なり、「来ない」は「こん」となる。本教材は機能ごとにまとめられているが、こういった文法的項目の説明をどこで行うか問題となった。アスペクトとケンの説明はコラムでとりあげ、活用表も巻末に記載したが、ない形はよく使う活用形なので２課に注として書き加えた。

「練習しよう」で取り上げた「誘い」表現のパターン「安かけん見に行かん？（安いから見に行かない)」では機能としては「誘い」、文法としては「ない形」が練習できるようにしている。さらに、「断る」パターンでは「～なければならないから」という表現を練習するが、ここでも「行かなんけんが」のように、ない形に接続する形となっている。

「バイトに行かなんとですよ（バイトに行かなければならないんです)」「テストがあってですね…（テストがありますから…)」は理由を述べる表現であるが、文脈によって断りの機能を果たすことがある。本教材では理由を述べることで婉曲に断るというストラテジーを採用した。

【3課　確認する】

教材開発の初期段階では、「確認する」という状況でよく耳にする熊本方言として、動詞の可能形の一部となる「～きる」と、それとともに文末に現れる「ど」も対象となっていた。「～きる」は、「食べきる」のように使われ、「食べられる」という意味を表す。また、「ど」は「～でしょ？」のように確認の意味を付加する。実際には以下のような例が考えられていた。

A:こんぐらいなら　一人で食べきると？

B:ちょっと、多かかな。

しかし、可能形については、熊本方言では能力可能を表す「～きる」と状況可能を表す「～らるる」があり、使い分けを練習するにはかなりの時間が必要であるという理由から、可能形は取り上げないことにした。また、現在の熊本方言では、「見たど？」のような「動詞た形+ど」の使い方はほとんどしないことから、「行くとだろ」、「行ったったろう」のように、より汎用性の高い「とだろ」のみを取り上げることにした。

この課では目上の人の行動について尋ねる表現が出てきたため、そこで使われる敬語をどの程度の敬意を表すものにするかが議論となった。その結果、この教材は方言初級編であることから、誰に対して使っても失礼にならない「～なはる」を取り上げることにした。熊本方言の敬語については、３課のコラムで説明を加えることにした。また、コラムでは「～なはる」とともによく使われる「～(ら)す」の活用を一覧表にして示している。

【4 課　伝える】

（1）のモデル会話は完成版では

キムさん：あれ？田中君は？

リンくん：先に行ってて。

となっているが、熊本方言話者はリンくんの部分を「先に行っとってて」と言うことが多い。熊本方言に限らず西日本方言では「～とく」は共通語の「～ておく」とは異なる用法が報告されている（山辺 2005）が、今回はこれに関する分析が十分にできなかった。教科書作成の過程で、当初「行っとって」としていたが、引用・伝聞を表す要素「～て」の導入を目的とした会話例としては適当ではないという意見が出された。今回は初級版熊本方言ということで、できるだけ、シンプルなものを紹介したほうがよいという編集方針から、「行っとってて」は「行ってて」に改訂した。

引用・伝聞を表す要素「～て」は「～てたい」など、終助詞と共に使われることも多いが、練習問題ではカジュアルスピーチでは「～て。」、目上の人には「～てです。」のみを使い「～てたい」は５課の「コラム：～たい」で、紹介するにとどめた。

【5 課　説明する】

「説明する」では、様々な「説明する」場面を考え、それらの表現の中で、共通して使うことのできる表現として「～てから」が挙げられた。大学生などの若者層では理由の説明に「頭が痛くてから」のような使い方を頻繁にしていることから、「～てから」を中心に教材を作成した。

教材作成段階では、以下のような「～けん」の表現を加えてはどうかという案もあった。

英語がわからんでから、大変だったったい。

英語がわからんだったけん、大変だったったい。

しかし、「けん」の用法はすでに２課の「誘う・断る」で紹介していることから、煩雑さを避けるため、この課では取り上げないことにした。この「けん」については４課のコラムで説明を加えている。

【6 課　許可をもらう・依頼する】

「依頼する」表現は共通語では「～てください」「～ていただけますか」があるが、熊本方言では「～てもらってもよか（ですか）？」となる。回りくどい言い方に聞こえるため、他の表現形式はないか、議論し、また、大学生に聞き取り調査を行ったりしたが、他になかった。友達同士の気軽な場面で、簡単なことを依頼する場合でも「エアコン、つけてもらってもよか？」「そこのドア、閉めてもらってもよか？」と、この表現を使う。使用頻度がかなり高く、留学生が耳にする機会も多いと考え、教科書の中に取り入れた。

また、「よか」は共通語の「いい」に相当し、「よか大学」「よかよ」など様々な使われ方をする。こ

れについては６課のコラムで取り上げ、説明を加えている。

【7課　考えを言う】

「普通体+とじゃなか（ですか）？」は共通語では「～んじゃない？」に相当する。「高かとじゃなか」は「高かっじゃなか？」「もうすぐ来るとじゃなか？」は「来っとじゃなか？」「行ったとじゃなか」は「行ったっじゃなか」と発音されることも多い。ルールとしては「形容詞か+っじゃなか」はわかりやすいが、動詞の場合、「-る」で終わる動詞は「る」が促音化し「-~~る~~　っとじゃなか」となる。「た形」では「たっじゃなか」である。一方「～とじゃなか」は「普通体+とじゃなか」「名詞~~だ~~+とじゃなか」と説明するだけでよい。熊本方言話者は「～とじゃなか」「～っじゃなか」の両方を使っているため、教科書では「とじゃなか」のみを採用した。このような促音化の問題は「とじゃなか」だけでなく、動詞の「-る」で終わる辞書形や「と」が熊本方言文末詞の「タイ」に接続する際にも見られるが(見るたい→見ったい、食べたとたい→食べたったい)、今回の教材は方言初級編ということから、すべて促音化しない形を取り扱っている。

【熊本方言の秘訣】

このページには、本課の内容に載せるまではないが、熊本方言の特徴として端的に紹介できるものを取り扱っている。また、第１課のコラムとして紹介しているのは、本教材を使って熊本方言を学習する早い段階で、典型的な特徴を把握しておけばより学習がスムーズにいくのではないかという編集方針からである。「よく使う言葉」として扱った９つの単語のうち「こぎゃん」「そぎゃん」「あぎゃん」「どぎゃん」「たいぎゃ」については、それぞれ「こがん」「そがん」「あがん」「どがん」「たいが」というふう拗音化しないもの、あるいは「たいぎゃ」については複数のバリエーションもあるが、【1課質問する】で述べたように一例として拗音化した単語をとりあげている。これも適宜その地域に合わせて、学習者に提示してもらいたい。

また、音声的特徴については、熊本方言を初めて学習する段階でアクセントまで習得することを目指しているのではなく、熊本方言について学習する早い段階で、アクセントを含む熊本方言の音声的特徴について事前に知識を得ておくことを目的としている。

【熊本方言の敬語】

教材開発の当初は熊本方言の尊敬語、謙譲語について全体像を示すことを目指していたのだが、それら全てについて調べ、概要を示すまでには至らなかった。熊本の敬語表現に関する資料を集めていくうちに、熊本の方言敬語のどのような表現が独特なもので、全国的な方言敬語表現の特徴と何が異なっているのかという点について調べる必要があると思うようになった。この点については、報告書

の中で取り上げた。今回取り上げている熊本方言の「～なはる」と「～(ら)す」を中心とした敬語の使用状況については、若者層ではその区別があいまいであるという調査結果も報告されている。しかし、今回の教材作成段階では実態調査による分析まで行うことはできなかった。実態調査の必要性についても報告書の中で述べている。

【熊本方言の動詞活用一覧】

熊本方言の動詞活用は共通語と異なるため、巻末に活用一覧を掲載した。基本的な活用に加え、可能形については能力可能と状況可能に分けて記載した。一覧表を作る際に議論した点を記す。

共通語の下一段活用の辞書形は熊本方言では「食べる→食ぶる」「開ける→開くる」「立てる→立つる」となる。現代語の下一段動詞は古語の下二段動詞が活用を変えたものであるが、熊本方言では現代語でも辞書形は下二段系の活用をするものがある。さらに、「教える」「聞こえる」などの「え」は「ヤ行」として活用するため「教ゆる」「聞こゆる」となる。「寝る」「蹴る」「得る」の辞書形は熊本方言で下一段動詞的に活用するが、ない形は「ねらん」となる。このように共通語の下一段活用の動詞は熊本方言では三種類の説明が必要であることがわかった。一覧表にどこまで説明機能を付加するか苦慮したが、三種類を示し、注を補うことで対処した。

上一段動詞のない形で「みん」「おきん」を加えるかどうかも議論となった。大学生が、使うか、使わないかで意見が分かれていたが、使う人がいる以上、活用表には載せようという方針で、掲載した。命令形の「寝れ」「せれ」も、年齢の高い層でしか使わないが同様の理由で掲載した。

「る」の促音化については教材の本文には出していないが、状況可能をあらわす「-るる」は促音化の割合が非常に高いということから、「-るっ」も併記した。

【アンケートについて】

今振り返ってみると、調査項目を作った段階では「方言を知る必要があると思うか」という認識が欠けていたように思う。

例えば、「9. 熊本方言を勉強したいですか。」という項目があるが、それに対する「いいえ」の回答として、「勉強したくない、使いたくない」「他県へ行ったら通じない」「日本語の勉強に役立たない」「多少興味があるが、別に勉強したくない」等の回答があった。

この点に関して、「積極的に方言を勉強したいか否か」という観点とは別の「日々の生活を送る上で方言を知る必要があるかないか」という観点からも調査項目を作っていれば、もっと異なった意見が得られ、より熊本在住の留学生（ひいては非日本語母語話者）の現状がわかったのではないかと思われる。

【イラストについて】

１．イラストの役割に関して

今回イラストを頼んだイラストレーターはもともと趣味で漫画を描いている人であり、教科書のイラスト等を描いた経験はない人であった。また、日本語教育や言語教育に関する分野に触れた経験もない人だったため、当然、最初は一般的な 4 コマ漫画を描くという認識のようだった。よっていちばんの課題は、教科書のイラストの役割を理解してもらうことにあった。

例えば、今回の「4 コマのイラスト」のストーリーは言語要素導入としてのストーリーである。そしてそのストーリーを補佐するためにイラストがある。そのためストーリーに起承転結、オチ等がないものも出てくる。一方、普通の「4 コマ漫画」には起承転結やオチ等があるのが普通だから、最初のうちは、起承転結がないと漫画として成立しないというのがイラストレーターの考えの中にあったようだ。そのため、イラストの中でのポイントが、会話作成者側とイラストレーター側でずれてしまうことがあった。

また、教科書のイラストと漫画としてのイラストでは、描かれ方が異なる。例えば人物とモノの大きさの関係や人物の位置関係などである。例をあげると、第１課（3）でスコーンが出てくる。通常の漫画ではあまり実世界の比率と変わらないように描くのが普通のようである。しかし、このスコーンが実世界の大きさの比率と同じように描かれると、導入手段としてのイラストという観点から見た場合、あまりポイントがわからない絵になってしまう。この点に関しても、最初のうちは教科書作成者側とイラストレーター側との間に認識のギャップがあった。

このように、教科書のイラストと一般的な漫画としてのイラストは異なる。よって、教科書のイラストの目的はあくまでも言語要素の導入にある、ということをしっかり分かってもらった上でイラストを描いてもらわないといけないと痛感した。また、イラストを頼む側も、何をポイントとして描いてもらうかという点をしっかり認識しておくべきだと思う。これは次の２とも関係してくる問題であると思う。

２．４コマ用の会話を作成に関して

会話作成の時点で、コマ割り（場面変化）と、何をイラストとして描いてもらうかまである程度意識に入れて会話を作るべきだと思われる。

例えば、第 2 課の（2）「バイトに行かなんけんが」の絵は他のものに比べてわかりにくいのではないかと感じられた。その理由として、具体的なものが描かれていないことが挙げられる。その他の 4 コマの絵を見てみると、そのすべてに取り上げた項目かストーリーに関する具体的なものが描かれている。例えば、第 1 課「質問する」の（3）「どぎゃんして～と？」ではスコーン、第 2 課「誘う・断る」の（1）「いっしょに行かん？」では映画の種類、第 7 課の「考えを言う」ではヘルメットと傘が描かれている。しかし、第 2 課の（2）には誘っている内容、断りの理由となる内容については描かれていない。誘うという行為には、誘うという働きかけの行為と誘う内容の 2 つがあるが、誘う内容に

関しては「ドライブ」と言語でしか表されていない。また誘う行為に関しても特に動作的なものは描かれていない。断るという行為に関しては、表情だけが描かれていて、断わりの理由は絵にされていない。そのため、ドライブをしている様子やアルバイトをしている様子などを描いた方がわかりやすくなるのではと思い、イラストレーターに提案してみたが、そうすると４コマ以上が必要になってしまうとのことであった。

このL2の（2）は、イラストの力が生かせなかった例だと思われる。上記のことを踏まえても、導入としての会話を練る際には、ある程度のコマ割りと、何をイラストとして描いてもらうかまで教科書作成者が考えておくべきだと思う。そのある程度コマ割りされた会話を実際に絵にするという段階になって初めてイラストレーターに渡すのがいいのではないだろうか。